



Title	Identification of four acidic amino acids that constitute the catalytic center of the RuvC Holliday junction resolvase
Author(s)	齊藤, 敦
Citation	大阪大学, 1995, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/39622
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏 名	齊 藤 敦
博士の専攻分野の名称	博士(医学)
学 位 記 番 号	第 12173 号
学 位 授 与 年 月 日	平成 7 年 12 月 6 日
学 位 授 与 の 要 件	学位規則第4条第2項該当
学 位 論 文 名	Identification of four acidic amino acids that constitute the catalytic center of the RuvC Holliday junction resolvase (Holliday 構造特異的エンドヌクレアーゼ RuvC の活性中心を形成する 4 個の酸性アミノ酸の同定)
論 文 審 査 委 員	(主査) 教授 品川日出夫 (副査) 教授 島田 和典 教授 杉野 明雄

論 文 内 容 の 要 旨

【目 的】

DNA 相同組換えのメカニズムは大腸菌において最も詳細に解析されている。大腸菌の RuvC タンパクは、相同組換えの後期過程において Holliday 構造と呼ばれる組換え中間体にニックを入れて解離させ、中間体を最終産物である組換え体 DNA に移行させるエンドヌクレアーゼである。RuvC は 19 kDa サブユニットのホモ 2 量体を形成し、エンドヌクレアーゼ活性には Mg^{2+} のような 2 個の金属イオンを必要とする。大腸菌の DNA polymerase I や RNase H I などの Mg^{2+} 依存性ヌクレアーゼでは、結晶構造解析および変異体の解析により、3 個または 4 個の酸性アミノ酸がヌクレアーゼの活性中心を形成していることが明らかになっている。これらの知見をふまえ、本研究では RuvC エンドヌクレアーゼの活性中心を形成する酸性アミノ酸を同定することを試みた。RuvC エンドヌクレアーゼの作用機序を明らかにする試みは、相同組換えの後期過程のメカニズムを解明する上で重要な意義があると考える。

【方法ならびに成績】

RuvC (172 アミノ酸) には 7 個の Asp と 6 個の Glu、合計 13 個の酸性アミノ酸がある。ヌクレアーゼ活性に関与する酸性アミノ酸を同定するため、何れかの Asp (D) を、Asn (N) または Glu (E) に置換するような *rvuC* 遺伝子の変異体、および何れかの Glu (E) を、Gln (Q) または Asp (D) に置換する変異体を作成した。変異遺伝子を持つプラスミドを *rvuC* 株に導入したところ、Asp7 変異体 (D7N, D7E), Glu66 変異体 (E66Q, E66D), Asp138 変異体 (D138N, D138E), Asp141 変異体 (D141N, D141E) は *rvuC* 株の表現型 (紫外線感受性) を相補しなかった。また *rvuC⁺* 株に導入すると、これらの変異体は dominant negative 表現型を示した。次に *in vitro* で変異体の機能を解析するため、これら 8 種の RuvC 変異タンパクを多量に産生させ高度に精製した。合成 Holliday 構造を用いて、Holliday 構造特異的 DNA 鎮切断能を調べたところ、全ての変異体において著しく低下していた。その一方で何れの変異体とも、野性型と同等の Holliday 構造特異的結合能を保持していた。また何れの変異体も、野性型同様に安定な 2 量体を形成していた。以上の結果より Asp7, Glu66, Asp138, Asp141 は DNA 鎮切断反応のみに関与しており、Holliday 交叉

点への結合や2量体形成には関与していないことが分かった。RuvCがエンドヌクレアーゼとして機能するには、活性中心と金属イオンの相互作用が必須と考えられる。Asp7, Glu66, Asp138, Asp141変異体では、この相互作用に直接または間接的に関与する酸性アミノ酸が変異したことにより、相互作用に支障をきたし、その結果DNA鎖切断能が著しく低下した可能性が考えられる。高濃度のMg²⁺存在下ではGlu66変異体(E66Q)の残存活性がある程度回復した。また高濃度のMn²⁺存在下ではAsp138変異体(D138N, D138E)およびAsp141変異体(D141N)の残存活性がある程度回復した。Asp7変異体に関しては、高濃度のMg²⁺またはMn²⁺存在下ともに残存活性の回復は認められなかった。Asp7が金属イオンとの相互作用に最も重要であり、直接関与している可能性が高いと考えられる。

【総括】

RuvCのX線結晶解析によりAsp7, Glu66, Asp138, Asp141が三次構造上DNA結合部位と考えられる溝の底部で近接して存在すること、そして溝の内壁には数個の塩基性アミノ酸が配位していることが明らかにされている。更に2分子のRuvCがそれぞれ、上記4個の酸性アミノ酸を含まない α ヘリックスを介してかなり安定な2量体を形成していることも示唆された。また結晶構造中でMn²⁺が、4個の近接する酸性アミノ酸のうちAsp7に最も近い位置に配位していることも分かっている。本研究では、4個の酸性アミノ酸がDNA鎖切断反応に必須であることが明らかになった。またこれらが Holliday交叉点への結合や2量体形成には関与していないこと、金属イオンとの相互作用におけるAsp7の直接の関与も示唆された。本研究で得られた結果は結晶解析の結果とよく一致している。Asp7, Glu66, Asp138, Asp141はRuvCエンドヌクレアーゼの活性中心を形成しており、金属イオンと相互作用することによりエンドヌクレアーゼとして機能することが明らかになった。

論文審査の結果の要旨

DNA相同組換えの過程では、2つのDNA分子は相同的な単鎖を交換することにより、Holliday構造と呼ばれる普遍的中間体を形成する。大腸菌のRuvCタンパクはHolliday構造を特異的に切断するエンドヌクレアーゼであり、組換えDNAの形成に重要な酵素である。本研究では、大腸菌のRuvCエンドヌクレアーゼの活性中心の構造を明らかにするため、存在する13個の酸性アミノ酸の何れかを類似アミノ酸に置換するような *rvc*遺伝子の変異体を作成し、相補性試験でその表現型を調べた結果、4個の酸性アミノ酸が活性に重要であることが示唆された。これらのRuvC変異タンパクを高度に精製して *in vitro*で Holliday構造特異的DNA鎖切断能、Holliday構造特異的結合能、2量体形成能を調べた。4個の酸性アミノ酸(Asp7, Glu66, Asp138, Asp141)がDNA鎖切断反応に必須であること、これらが Holliday交叉点への結合や2量体形成には関与していないことを明らかにした。これらの結果より上記4個の酸性アミノ酸が RuvCエンドヌクレアーゼの活性中心を形成していると結論した。

本研究は、Holliday構造を認識して解離させる RuvCの反応機構を分子レベルで解明する上で重要な手掛かりを与えるものであり、学位の授与に値するものと認める。